

2019. 9. 21

三丘アカシアトークカフェ第3回

於三丘会館

旧暦の美学

金田 晉（高9回）

前置き

昭和29年入学、32年卒業の金田です。10歳下の弟もここで世話になりました。私自身、このキャンパスに入るのは50年ぶりです。私たちの学んだ校舎が跡形もないのは少しさびしいですが。でも昔の学友にも会うことができ、ほんとうにうれしく思います。

本日は、皆さまの前で「旧暦」の話をさせていただきます。といってもふつう「旧暦」という名でよんでいる明治改暦までつかわれていた天保暦について、今日語るつもりはありません。むしろ、東アジアの海岸部に位置する、私たちが日本列島とよんでいる島々で6世紀ごろからつかいはじめた、中国由来の太陰太陽暦のことを考えています。「和暦」という呼び名があるではないかと指摘されることも承知しています。でも和暦とは、元号を掲げる日本独特の紀年法で、孝徳天皇が即位した大化元年（645年）にはじまるとされ、たとえばその前年は、皇極天皇の名を借りて「皇極天皇3年」とよばれますが、これは正式には和暦に数えられません。私は、天皇の名を冠そうが、元号を冠そうが、どちらも同じ太陰太陽暦をつかっていて同類なのですから、そんなところに峻別線を設けても意味がないと、考えています。一方、明治以降「一世一元の法」がさだめられ、明治、大正、昭和、平成を経て、今年から令和が元号になりました。しかしこれらは西暦（グレゴリオ暦）です。暦法、暦学が全く変わりました。元号をつかうといって和暦の中に入れたのを、私は明治政府の詐術（トリック）だと考えています。和暦は明治6年のグレゴリオ暦への改暦をもって終わっているはずです。だから、ここでは紛らわしい「和暦」という語を避けました。あえて「旧暦」の名称をつかわせていただきます。

昨年2月には毎日新聞紙上で、また9月には中日新聞（東京新聞、北陸中日新聞にも転載）紙上で、旧暦に関する、私への大型インタビュー記事が相次いで掲載されました。

この記事が三丘同窓会の幹事の方の目に留まり、新聞記事では言い残したこともいっぱいあるだろう、同窓会で話してはどうかとお誘いを受けました。もちろん喜んで応諾しました。お蔭で、今日ここで皆さまの前に立つことができた次第です。母校を再訪できる機会を作っていただいた同窓会の幹事会の皆さまに感謝しています。

本日は暦、旧暦を取り上げて、江戸後期化政文化の代表的画家酒井抱一の一組の屏風絵「夏秋草図屏風」を手掛かりに、日本の季節の秋のすばらしさ、それから絵の面白さを、ご出席の昔の同級生や三丘同窓会の皆さまとたのしみしたいと思います。

はじめに

新暦あるいは西暦では、9、10、11月が秋です。今日は9月21日、秋になって、3週間というところです。感覚としては初秋です。でも旧暦では、七、八、九月が秋です。今日は八月二十三日です。旧暦では八月は秋たけなわです。二月五日が元旦なので、ほぼ1か月後れている勘定になりますが、あわせて季節感が微妙に変わりました。新暦では七夕を7月7日、つまり夏の行事に数えられていますが、旧暦の七月七日は秋のはじまり、初秋でした。季節感覚がちがいます。

お盆の行事も少し混乱しています。もともと旧暦ではお盆は七月十五日が中心でした。それが今日東京地区では新暦の7月15日が新盆で行われ、その他の地域では8月15日が旧盆で行われています。仏さまを送るという行事が東京と東京以外でちがうというのは、考えてみれば少し異様です。不幸と言ってもよいと思います。これは後から説明しますが、明治になって、旧暦が新暦（グレゴリオ暦）に改暦されたことからくる混乱です。東京地区では七月十五日という月日名を引き継ごうとして、新暦になっても7月15日にしました（新盆）。一方、その他の地区では、七月十五日の中身を引き継ごうとして、新暦は大体1か月早いということから、お盆は8月15日になりました（旧盆）。私たち和泉の地方では先祖を旧盆で送ります。そのお盆は、何時の間にか夏の行事になってしまいました。でもお盆はもともと秋風を感じる立秋（今年は7月8日）のあとの満月（十五日）の頃でした。

季節は、新旧暦いずれも3か月。旧暦では、それを初（孟）、仲（盛）、季（晩）と区別していました。七夕もお盆も初秋の行事でした。

ちょうど1週間ほど前、9月13日は＜中秋の名月＞でした。今年、天文学上の満月は翌日の14日でしたが。いずれにせよ新暦では9月は秋のはじまり。でも9月13日は旧暦では八月十五日、仲秋でした。季節の「中」というだけでなく、ほんとうの「中」と言いたいために、「仲秋」ではなく「中秋」という字を当てたと聞いています。明後日は9月23日で秋分です。秋の真ん中であるはずですが。明治の改暦は、日本人の季節感を狂わせてしまいました。罪は大きい、と思います。

だから、皆さまは今日を秋の走りなぞと思わないで、私の「旧暦の美学」で秋たけなわを満喫していただきたいと思います。

1. 酒井抱一の「夏秋草図屏風」を前にして

季節をうたうという点では、鎌倉時代に曹洞宗を興した道元の歌が有名です、「春は花夏ほととぎす秋は月冬雪さえて涼しかりけり」。日本には、大陸由来の四季山水図が、特に室町時代盛んに描かれました。江戸時代、狩野派の絵師たちが、平和になった時代の武家屋敷の屏風や襖に多くの四季山水図を描きました。それとはちがって、夏から秋へという、季節の移り変わりの微妙な変化を描き切ったという点では、私は酒井抱一の名作「夏秋草図屏風」を第一だと思っています。

この作品は、現在東京国立博物館に所蔵されていて、重要文化財の指定を受けています。保存上の問題もあり、同博物館では独立した別仕立ての屏風として展示されていますが、もとは、こちらも重要文化財の指定を受けている尾形光琳の「風神雷神図屏風」の裏に描かれていました。両者は表裏一体の両面屏風でした。



A. 作品を読む前に

(1) 作品制作に至る経緯

この屏風は姫路藩主酒井家から当時の将軍徳川家斉の実父一橋治済（はるさだ）に贈られました。当時治済は、老中松平定信に制されて「大御所」という尊号こそ称することが適いませんでした。将軍の実父として権勢を誇っていました。贈答の直接の動機は、治済の従一位昇進への祝いとか、将軍家斉の息女喜代姫と酒井忠実（ただみつ）の子、忠学（ただのり）との婚約祝いとか、いろいろな説があります。治済からの注文という説もあります。

屏風の贈答は文政4(1821)年頃に行われました。将軍家斉の在任期間は1787年から1837年、じつに50年に及びます。家斉は15歳の若さで就任したのですから、当初幕府経営には何も知りませんでした。そのかわり後見人となった老中首座松平定信が圧倒的な権力をもって寛政改革(1787-1793)を断行し、かれが更迭された後も「寛政遺臣」とよばれる松平信明らがその政策を継承しました(1793-1803)。その後は、家斉は水野忠成などを老中に引き立てたりしましたが、定信のような権勢などあるはずもなく、実父治済と共同で、政治の実権を握ったのでしょう。江戸の町人文化が花開いた文化(1804-1817)、文政(1818-1829)期、いわゆる化政文化期の幕府側の実質的頂点に君臨していました。その絶頂期に、治済は酒井家からこの屏風の贈答を受けたのです。

光琳は、京大坂の町人文化が栄えた元禄時代に活躍し、「法橋」の称号を得た絵師です。かれがこの絵を描いて 100 年が経っていました。治済の頃その評価はますます高まっていたはずですが。その治済があえて所望してこの絵を手許に置こうとしたのだとすれば、家屋敷や財産を手放して放蕩にふけり、藝術一本で生きた尾形光琳の鬼気迫ると言ってよい強さに対峙しようとしたことに、私は驚きを禁じ得ません。

元来、徳川宗家は光琳と無縁ではありませんでした。光琳の出た呉服商雁金屋は家康、秀忠の時代から衣裳を収めたという取引関係があり、特に秀忠の娘東福門院（後水尾天皇中宮）は最大の得意先でもありました。作品授受のかたちで光琳との関係を作ることは、一橋徳川家が御三卿の一であることを考えると、一橋家の徳川宗家との結びつきをさらに強固にするはずでした。芸術の鬼と対決するという、自分が壊されるかもしれない危険を冒しても宗家と繋がろうとするものだったでしょう。

その光琳の屏風の裏に裏屏風として絵を描くよう、贈答側の酒井家本家からその分家筋の酒井雅楽頭家に属する抱一に依頼がありました。分家とはいえ、雅楽頭家は既に幕府大老まで出す名家でした。

酒井雅楽頭家にとっても光琳は無縁ではありませんでした。かつて光琳が江戸滞在した折り、同家から扶持を受けていました。はした金ではなかったはずですが。抱一に裏屏風制作の依頼がきたのは、かれが江戸琳派の大成者として既に名を成していたからでしょう。

抱一の「夏秋草図屏風」は見事な出来でした。そこには夏から秋にかけての草花が霊妙な時間差をもってしっかりと、しかも気品高く描きあげられていました。屏風の前に立つと、私は初秋の野山を歩いてそこに咲く草花を実際に見ているかのような感傷に、思わずひたってしまいます。抱一は長崎派をも学んでいて、写実描写の力量は十分すぎるほどありました。

（２）観象授時。国産の暦の作成と「夏秋草図屏風」

だが、この絵を、そのような写実への素直な感動だけですませてよいものでしょうか。大方の批評のように、夏から秋への自然的景色の変化をよく写し取ったという賛辞だけですむのでしょうか。送り主の酒井家が破格の名品を贈る意図、分家雅楽頭家の光琳への思い出、治済・家斉親子の一橋徳川家の徳川宗家への、あるいは他の二卿へのライヴアル意識等、複雑な政治力学、そして何よりも抱一自身の作家としての野望などを考えると、そのような単純な感動をあげるだけでよいのでしょうか。そもそもこの名品を受けた治済は、たとえ江戸琳派の総帥として名を馳せているとは言え、「光琳」という宝物に家臣にすぎない一絵師の筆が加わることを、特別のことでもないかぎり喜ぶのでしょうか。特別のこととは、治済・家斉の幕政を賛美する、それも光琳画にかこつけて行うその趣向に治済が「デカシタ！」と膝をうつ場合だけでありましょう。見事な写実画の裏にこうした策略を織り込んだ、きわめてソフィスティケートな意思が働いていたのでないのでしょうか。

私は、そこに古代中国の皇帝たちの暦に託す理想であった「観象授時」の思想を見たい

と思いました。天体を観測し、正しい天象、地象を把握し、暦（時間）を作って民の生産活動をうながす、という意味です。屏風に、家斉をそのような天子、稀代の名君と仰ごうとする賛辞がこめられていたのではないのでしょうか。

暦学に関しては、日本では既に6世紀半ば、大陸から輸入しています。日本書紀・欽明天皇十四年（西暦に換算すると553年）の条に、百済に医、易、暦等の博士を交代で請来したことが記され、暦書も送ってほしいと記されています。その前年の十三年の条に、百済からの使者に、物部や中臣の重臣が天皇に次のように答えているのと対照的です。「百八十神を以て春夏秋冬、祭りを行っている」、と。八百万の神々を春夏秋冬その都度お祭りする時代から、中国の暦法にしたがった国家統治のための制度としての暦学の時代に移ってゆく、政治の転換期の様相がほの見えています。そこに私たちは古代中国の「観象授時」の思想を読み取りたいと思いました。

7世紀になると、日本は律令国家の建設を目指して、暦法への関心が高まります。特に持統天皇は夫天武天皇といっしょに飛鳥浄御原京を、自身でも藤原京を建てるなど、中国式条里制の都を建設することに力を入れています。一方で、暦法の導入にことのほか熱心でした。これは、国家財政・納税の強化のために必要だったと思います。国家的規模の暦は米の増産を基本にする農業管理に必要だったのでしょう。だがその暦は中国暦そのままのものでした。中国では基本的に海岸部を標準にした暦です。そのままでは当初から日本の風土からずいぶんずれているはずで、経度的には約1時間ちがいます。しかも江戸時代になっても、平安時代の9世紀に改暦されたままの宣命暦は800年以上そのままつかわれてきました。日食月食を含めて実際の天体の動きからずいぶんずれていました。

その江戸時代になって、自分たちの住む国土の緯度、経度を測定して、日本独自の暦を作成しようという動きがはじまり、改暦の気運が盛り上がりました。幕府の碁師渋川春海がその先頭に立って、日本の国土の天体観測のデータを集めながら、イスラム天文学を下地にしてできた元の授時暦を範とした暦、貞享暦（1685年）を作成しました。5代将軍綱吉の時代です。元禄（元年、1688年）文化のはじまる直前です。水戸の徳川光圀、会津藩の保科正之はこの改暦事業を支援したと言われますが、じつはかれらが春海の頭脳をつかって、改暦を積極的に推し進めたのだと思います。江戸時代、人口が増加してゆく時代に合わせて、農業、特に米の計画的増産は、為政者の必須の課題だったのでしょう。かれらこそが日本独自の暦を作ろうとする主導者だったのかもしれない。中国古代の天子の理想「観象授時」を、この徳川の代に実現しようとしたのだと思います。

8代将軍徳川吉宗は日本独自の暦を作成することに、みずから観測器具を製作するほどにまで熱心でしたが、その際西洋天文学の導入の必要を痛感しました。そもそも吉宗が西洋に強く関心をもったのは、4代将軍家綱への献上品『ヨNSTON動物記』にふれたことによるとされています。かれは、この書に触発されて、南の国から象を江戸までよびよせました。

当時、中国ではイエズス会宣教師たちによって西洋の最新の天文学書が漢語訳で出版さ

れていました。それらを日本でも読めるようにするため、吉宗は寛永の禁書令の緩和を図り、「禁書緩和令」(1720 年)を発令しました。直接キリスト教伝道を目的とした書でなければ、輸入を許可したのです。この吉宗の願望は次の宝暦暦(1755 年)には適いませんでした。和製三代目にあたる寛政暦(1798 年)において見事に達成されました。老中首座で幕府補佐役の松平定信は、「寛政異学の禁」を命じましたが、それはみずから開校した昌平坂学問所のためのもので、朱子学の正統を説き、古学等を排するためでした。そこで講じられない蘭学および西洋学、もちろん天文学や暦学は「異学の禁」の外に置かれていました。祖父吉宗を信奉した定信は、むしろ西洋天文学の深化を積極的に支持しました。改暦の年、定信は既に老中を追われ、松平信明等が老中の座にありましたが、寛政の改革路線は維持されていました。

それに先立って 10 代将軍家治の老中であった田沼意次もまた、重商主義的政策により景気浮上を図る一方で、国内的には干拓事業によって農地拡大に力を入れ、蝦夷地の調査や外国との通商にも熱心でありました。天文学、暦学の奨励は、吉宗以後強い糸でしっかり結ばれていたと思います。

家斉の時代、卓越した天文学者高橋至時(よしとき)は漢語訳された西洋天文学書「歴象考成後編」を修得し、地球が太陽のまわりを楕円軌道で公転するというケプラーの天文学をも理解しながら、寛政暦を作成しました。この暦は、享和 2(1802)年におこった日食に対して 15 分のずれがあったということで、至時には不満だったそうですが、私たちにはずいぶん精確な暦だと思われます。

至時は暦の改良に向かって漢語訳ではなく、直接西洋語原典からの暦学の修得を志し、幸いフランス人ジェローム・ラランドの“Astronomie”(『天文学』)(初版:2 巻本 1764;第 2 版:4 巻拡大本 1771-1781;第 3 版:3 巻本 1792)の第 2 版のオランダ語訳(1773-1780)に出会い、日本語訳にとりかかります。残念なことにかれは同書を途中まで訳した(『ラランド暦書管見』)ところで、病を悪化させ、早世します。かれの死後、最初からかれの暦法研究の同志であった間重富や至時の息子景保、景佑の 2 人らが、研究成果の火事焼失などの試練にもめげずその遺志を継いで、今日ではもっとも精確な太陰太陽暦として名高い天保暦(1844 年)を完成させることになります。今日私たちが「旧暦」と呼んでいる暦です。ただこれは抱一「夏秋草図屏風」制作以後の歴史なので、ここでは触れません。

伊能忠敬は至時より 19 歳年長でありましたが、至時に暦学と天文学を学んだ天文学者でした。師の天体の測量法にしたがって、日本全国を 17 年かけて踏破して測量し、文化 17(1816)年、ついに「大日本沿海輿地全図」を完成させました。

こうしてこの時期家斉の代に、天体に関する「寛政暦」、大地に関する日本全図ができあがりました。日本の歴史においてこれは画期的な出来事でした。私たちははじめて、自分たちの住む土地の地形を知り、四季を含めた天体の動きを知るようになったのです。家斉こそ観象授時を実現した名君と評することができます。あるいは抱一はそう持ち上げようとしたのかもしれない。

さらに言えば、寛政暦への改暦の年、杉田玄白らは『解体新書』（1798）を翻訳し、人体の解剖図を描き上げ、大槻玄沢は、その修正版『重訂解体新書』（1826）を出しました。つまりこの時期、吉宗の悲願であった天体、国土、人体の科学的世界の解明が一挙に進んだと言えます。

（3）暦と天文学－西洋とアジアの相違

暦は天文学の近くにある、長い間そう私は思ってきました。太陽や地球や月は天文学の領分であり、私たちの暦の領分でもある、そう思ってきました。

でも、現在私たちが使用している西暦、正確に言うとグレゴリオ暦の採用の経緯を知ると、そのことが疑問になります。明治新政府は、アジアのどこよりも早く暦を欧米に揃えました。明治五年十二月二日（天保暦）の翌日を明治六（1873）年1月1日（グレゴリオ暦）としました。それは脱亜入欧という政治的理由によったのでしょうか。だがわざわざその日を選んだのは、財政的理由によるものでした。公務員の給料から2日分しか働いていない十二月分をカットし、旧暦だと閏月が加わって13ヶ月になる翌年を西暦で12ヶ月にすます、計2ヶ月分給料が節約できる、という理由でした。天文学と無縁でありました。

だが本家本元のグレゴリオ暦もまた人後に落ちませんでした。改暦の内容は、復活祭の日取りを春分の後の満月の後の日曜日と固定し、1582年10月4日の翌日を10月15日にするということでありました。その頃、ポーランドのカトリック司祭コペルニクスは地動説を提唱していましたが、その思想を改暦に反映させることはありませんでした。それどころか、1600年、地動説を唱えたジョルダノー・ブルーノは当の教皇庁によって火炙りの刑に処されました。グレゴリオ暦は天動説のままでした。

ガリレオは1609年に自作の望遠鏡で月を観測し、天体観測に乗り出しました。同年、ケプラーはその著『新天文学』で、地球は太陽のまわりを円周ではなく、楕円軌道でまわっていることを明らかにしました。近代天文学は暦と決別して独自の道を歩み始めたのです。

日本ではちがいます。渋川春海の貞享暦はイスラム天文学をもとに作成したものでしたが（1685年）、高橋至時の寛政暦は西洋天文学、とくにケプラー天文学を理解して作成されたものでした（1798年）。さらにその次男渋川景佑が作成した天保暦は最新の西洋天文学の事情を踏まえたものでした（1844年）。改暦は世界の天文学を吸収することの歓びをともなっていたはずです。グレゴリオ暦が西洋の近代天文学の進歩に背を向けたのに対して、江戸時代の暦は世界の最先端に立っていたことになります。

明治政府は世界に誇る天保暦を廃止し、旧いグレゴリオ暦を公式暦としました。江戸時代の暦学と天文学の結びつきの伝統を捨てたということになります。

西洋の天文学を受け止めた寛政暦が施行されている時代に、抱一は光琳の「風神雷神図屏風」の裏屏風として「夏秋草図」を描き、家斉の実父治済への贈与が行われました。ここに描かれる自然は、夏が終わって秋が始まる頃の、正確に日本の風土に合った花野の自

然です。この作品は日本独自の暦法の最初の絵画的表現といって過言でないでしょう。

(4)「風神雷神図」の系譜

光琳の主題「風神雷神」についてもふれておきましょう。風が吹き、稲妻が雨を呼ぶ、それらが怒りの形相を呈するとき、その猛威に私たちはひれ伏さざるをえません。その力が風神や雷神へと神格化され、また仏の近くにおいて、仏の教えの守り手となり、国家統治の勧善懲悪の裁き手となりました。一方、両神の象徴する力は人間の日々

の汗と労苦に大きな恵みと豊かさをもたらしてくれました。五穀豊穡の神でもありました。

その像容の日本的展開には、鎌倉時代作と言われる京都蓮華院三十三間堂の風神雷神の像が大きな役割を果たしました。とりわけ俵屋宗達への影響は大きい。風神は風袋を首に巻き、雷神は小鼓を繋ぐ円形の輪を背負っています。

宗達は1570年代から1640年代の人で、秀吉の安土桃山時代の気風をよく伝えています。かれの「風神雷神図」は金地の上に風神と雷神を画面からはみ出さんばかりの勢いで描かれています。バロック的構図です。1620年代以後に描かれた、とされます。既に徳川の時代に移って、宗達最晩年でしたが、かつての時代的余韻がなお失せていませんでした。宗達は琳派の祖とされます。



上図：宗達「風神雷神図屏風」。下図：光琳「風神雷神図屏風」



左図：風神像、蓮華院三十三間堂。右図：雷神像、同左。

尾形光琳(1658－1716年)は宗達の「風神雷神図屏風」を知り、その風神雷神をそっくりトレースして新たに「風神雷神図屏風」を制作しました。ただし像をはみ出すような構図を好まず、描画面の方をひとまわり大きくし、両神をその中に無理なく収まるようにしています。結果的に両神は少し大人しく小さく見えます。両者の好みのちがいも見て取れます。

酒井抱一(1761年－1829年)も光琳の世界を深く愛し、

江戸に「江戸琳派」をおこしました。「風神雷神図」も描いています。3人は、生前の面識はなく、生きた時代も風土もちがうのですが、遺した作品を通じて「琳派」という美意識を継承してゆきました。江戸時代、狩野派とは別の、もう一つの美意識を形成してゆきました。それは町人文化からはじまり、幕府の頂点の武家社会にも広がる美意識の形成でした。

抱一はその光琳の「風神雷神図屏風」の裏に、「夏草図屏風」を描く機会を得たのです。その感慨はいかばかりだったのでしょうか。

B. 作品を読む

以上、私は酒井抱一「夏秋草図屏風」の成立にまつわる状況を見てきました。これから「屏風」の世界に入ってゆくことにしましょう。屏風は2曲1双です。日本画は右から左へと進行します。まず、右隻図から見てゆくことにしましょう。同時に西洋の強固な額縁絵画とちがって、日本の絵画は、画面の外へ想像力を働かせることのできる広がりをもっています。光琳の「風神雷神図屏風」と抱一の「夏秋草図屏風」の位置関係を確認しましょう。私の話の展開から言うと、掲載した図は、ほんとうは風神雷神を下に、抱一の夏秋草図を上に見てほしいのですが、そうした図を見つけられなかったので、皆さまの頭の中で上下逆様にして見るようにしてください。



(1) 右隻図を読む

屏風の表裏関係を確認しましょう。右隻の夏草図は雷神図（表屏風で左隻図）の裏に当たります。

仲夏の五月（さつき）のあとには、晩夏・水無月のひと月がつづきました。雨降らぬ小暑、大暑の中で地面はひび割れするほど渴き、茎が長く葉は細い、そのようにして水分の蒸発を最少にするようなかたちの草花しか地上には見えません。画中の青薄（ススキ）、女郎花（オミナエシ）、撫子（ナデシコ）はすべてそのような草形をしています。舟型のストローのようなかたちをして、朝方に冷えた大気的水分を葉先に集めてできた露滴を、その上をころがすようにして、大半は蒸発させながら根に送っているようでした。その大地の渴きが極限の頃、突然暗雲湧いて夕立がおこります。大暑の末候（七十二候の第三十六候）では、「大雨時行」とあります。夕立の光景です。右隻はちょうどその直後の光景を描いたのでしょう。

強い夕立がありました。しおれていた草花が一挙に生氣を取り戻します。だがそれがどれほど烈しかったか、右上部にできた路面の水の流れがその烈しさと量を示しています。その水流の曲線、藍色が美しい。その中をきらびやかな金糸線が走ります。琳派絵画の、



生命をうちに希求する卓越した美意識でもあり、本屏風の序章をなしています。

夕立の雨に打たれて、その強さと重さで青ススキは葉先が下に垂れています。まずその垂れ方を見てゆきましょう。右隻の主役はススキです。そこでススキは画面の下から3分の2のところまで必死に身を耐えています。だが左扇ではその高さは半分以下にまで打ちつけられます。そしてさらに左隻の右扇にゆくと3分の1の高さにまで打ちひしがれます。夕立の強さと量はただごとではない。おそらく夕立の前、ススキは、ここでは描かれては

いませんが、画面の上辺までまっすぐ立ち上がっていたでしょう。それが扇ごとに3分の1ずつ、高さを下げてゆきます。私は、これを時間経過の表現と読んでゆきたい。あとひととき夕立がつづけば、ススキは地に倒れ、地を這ったであります。おそらくススキは地を這う間際まで、ありったけの力をしぼって身を持したのであります。

右隻の右扇は垂直に、しかも下方に垂れています。雨の重さでしょう。ススキの葉先は、夕立に屈して下方に垂れはじめます。だがその垂れ方は、葉先を垂れて屈しながら、他方で夕立の力を殺いで、何かを護っています。ススキの描き方をよく見ると、葉の垂れ方は一様でなく、さまざまに乱れていますが、特に葉表の緑色の間に薄緑色の裏側を混在させていて、そこに江戸琳派のデザイン感覚を指摘することもできますが、私はデザインの平面処理以上のものを感じます。夕立の強い力に身をよじりながら身を護ろうとする姿に、必死さ、一種のエロティシズムさえ感じます。

しかも自分を護ろうとするだけでありません。それ以上に、ススキは身をかぶせるようにして必死に、白ユリを雨から庇護しています。お蔭で、雨に弱い白ユリのラッパ状の花弁は、下向きに垂れてはいませんが、美しい姿かたちを崩すことはありませんでした。



右隻図左扇では、右扇とは別の新しい様相を展開させます。ススキは画面の三分の一近くまで下部に打ちひしがれます。だが打たれてできた空間の中で、ススキはユリやナデシコたちを護り抜いています。そこには庇護されたものたちの安堵と歓びがあります。私はここに、西洋のそれとは質を異にする空間の奥行き、遠近法を見ます。ススキは、庇護の空間をつくり、その間から護られた空間の広がりや温かさを感じます。庇護をえた花たちは新しい動きをはじめます。ナデシコの赤がその歓びです。微妙に主人公が入れ替わっているようです。右隻右扇では下を向いていたユリが、左扇になると一輪はつぼみのまま勢いのある横面を見せ、もう一輪は顔をあげています。しかもオシベまでしっかり描かれています。いのちの勢いのはじまりです。

この絵が描かれた時代、契沖、賀茂真淵、本居宣長などの率いる国学の興隆があり、その中で万葉集の再評価が盛んに行われていました。その万葉集作家の中に山上憶良がいて、秋の七草をうたう二首を収録しています。

秋野尔 咲有花乎 指折 可伎数者 七種花（万葉集秋雑歌、8-1537）

（秋の野に 咲きたる花を／指折り（ゆびをおり）／かき数ふれば／ 七種の花）

芽之花 乎花葛花 瞿麦之花 姫部志 又藤袴 朝兒之花（万葉集8-1538）

（萩の花 尾花葛花 撫子の花／女郎花 また藤袴／朝貌（あさがお）の花）

俳人でもあった抱一はこの憶良の歌を知っていたでしょう。屏風には、「七種の花」が描かれています。でもそこには登場しないユリの花を抱一は描いています。ユリは気品をもって、花々の王者のように描かれています。ユリは憶良の季節には少し早かったのでしょうか。

新しい展開がはじまります。同じくススキに護られていたナデシコが、朱色を放って画

面を一挙に明るくし、ススキが作った空間を広げています。そして左扇のちょうど中央に、女郎花（オミナエシ）がススキの庇護空間を破って真っ直ぐ延びて、黄色い花を咲かせます。しかも黄色の花びらの先にまだつぼみの緑の点をまるで帽子のように乗せています。その姿は、画面下の三分の一に抑えられていた若いエネルギーを一身に集めて立ち上がっているように見えます。三分の二は、銀地の余白です。その余白に向かって氣息をはいているようです。オミナエシは右扇へと逆流する上昇の勢いを示唆しているようです。

右扇になお倒れず踏ん張っているススキの頂上部にヒルガオの花が咲いています。その咲き方から察するに、私はこれまで右上から左下への対角線構図を下降方向にだけ追いかけてきましたが、今度はオミナエシの立ち姿を契機に途上方向にも向かっている、それがヒルガオにつながってゆくようにも思えてきます。

そのオミナエシは、左隻図の、どこまでも倒れてゆくススキに希望をあたえました。私は絵師抱一の、左隻図に移る気迫を見ました。

（２）左隻図を読む

左隻図に移りましょう。右扇下 3 分の 1 以下のところで、ススキはなお耐えて空間の中の草花を護っています。右隻図からの延長で、右上から左下へ傾斜してくるススキの流れ



がはっきりしています。秋草は、風神図（表屏風で右隻図）の裏に当たります。右隻図が細部を除けば全体に＜静＞だったとすれば、こちら左隻図は＜動＞の世界であります。そ

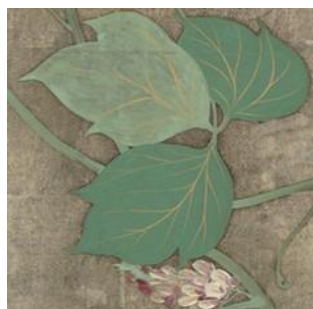
の右扇で別の一株のススキが立ち上がります。こちらは倒れる青ススキではなく、しっかり花穂を上方に突き出したススキあるいはオバナです。それが左隻図の運動を主導するヴェクトルを決めています。そこに巻き付いて祝福するように、山ぶどう（エビカズラ）の赤い葉群が立ち上ってゆきます。その細葉に護られるように、フジバカマが花をいっぱい咲かせています。ススキはオバナにメタモルフォーズ（転形）しているようです。



山ぶどうの瑠璃色の実が美しい。それが右隻図右扇の右上端の水流（潦＝ニワタズミ）の藍と反響しているようです。



左隻図全体の導き手は、オバナからクズ（葛）に変わります。クズは右から吹いてくる強風に葉がひきちぎられそうになりながら、広い葉の葉裏を返しつつ、左上方にのびています。（右隻図のススキの葉裏の返しと対照的に、こちらは少しゆるやかにおおらかに翻っている感じです。）オバナは強く、しなやかであるが硬い。クズの葉は軽くて柔らかい。クズの少しピンク色の花も美しい。右下から左上へ上昇してゆく対角線構図が月の照らす爽やかな夜景を広げているようです。



風で引きちぎられて空中に舞う二枚の山ブドウの紅葉は空間を自由に軽やかにしています。この光景は初秋というより、中秋の名月の頃、山ぶどうが他の紅葉に先立って葉を赤くする頃が相応しい。構図と実際の光景の差が感じられます。

左隻図の右扇は、右隻図の左扇がそうであったように、画面の左半分の下部三分の一のところに、大きなドラマが潜ませていました。

（３）二曲一双図として眺める

抱一は、これらの夏秋草図を銀地（銀箔、銀泥等）の上に描きました。ふつうの銀は時代が経つと黒くなります。それが今も品のよい色をたたえています。なんというすばらしい職人の技でしょうか。光琳の表屏風は金地の上に、宗達のそれに比べると墨を加えたのでしょう抑制された金地になっていますが、躍動する風神雷神を描いています。それは天、神の世界、昼の世界です。こちらの裏屏風のほうはおそらく夏から秋に移り変わる頃の、特に左隻図は月光に輝く夜の世界です。

ただし、一般に抱一の銀色輝く世界は、一様に夜の風景だと言われていますが、もう少し屏風画面を見てゆく必要があります。右隻図と左隻図は、視点の方向がちがうよう

に思います。右隻図は、視点を高くとり、上から地面を見下ろしているようです。水流とススキたちの夏草と水をいっぱいに含んだ地面を眺めているようです。昼であっても夕立によって辺りが一挙に暗くなって、そのあとふたたびオミナエシやヒルガオの花が開く雨上がりの光景になります。ヒルガオは一日花で、夕方にはしぼんでしまいます。既に夕方、暮色が漂う時間帯なのでしょう。一方、左隻図では、ツタは風に吹き上げられ、左上方へ対角線に沿って延びひろがっています。吹きちぎられて宙に舞う2片の紅葉が空間を色で染め、印象的です。視点はその空を見上げるように向けられています。これだけ花や葉たちの色が鮮やかなのは、おそらく満月かそれに近いからでしょう。背景の銀地は月煌々と照る夜の空でありましょう。

その銀地の上に夏秋草の、つまり季節の世界が描かれています。宗達にも、光琳にも風神雷神を描いて、季節の感覚はありませんでした。宇宙、天体には本来季節はありません。神の世界には季節は似合わないと思います。だが人の世界には季節がある。地球から見上げた天空には季節がある、そこを抱一は描きたかったのでしょう。

美術史研究者たちは、抱一の江戸琳派の絶妙の美意識を説き、この作品のすばらしさを見事に語ってくれます。だが私は、もう一歩先にすすみたいと思います。なぜ、将軍家斉の父一橋治済（はるさだ）への贈答品に、この画題を選んだのだろうか、と。

家斉の時代に寛政暦（1798年）が施行されました。国産3代目、西洋天文学を学んで作成した暦です。しかも地動説、といっても地球の軌道を楕円軌道とするケプラーの法則を基礎にして生まれた暦です。その上、伊能忠敬による日本全土の国土測量と連動した暦です。曾祖父徳川吉宗の悲願が成就されたことでしょう。

まことに抱一の「夏秋草図屏風」は、観象授時への美的表現であったと言えないでしょうか。美的暦象の美学の誕生と言えるのでないでしょうか。その屏風の中で、治済らはどこにいますでしょうか。私はこの2曲一双の屏風に描かれているススキに治済・家斉らを仮託しました。かれらは民を必死に護ったのです。そのように描かれてこそ、一橋治済はおそらく喜び、満足したにちがいありません。最高の献上品となったのでしょう。

2. 暦と天体－太陽と月と地球

だが、私たちは、夏から秋への季節の変わり目という極小の世界のリアリズムにうっとりしているだけで、終わってはいけないでしょう。その美しさをささえているのは、宇宙の天体の運動です。あるいはこう言っていいかもしれません。この極小の美しさは、天体の奇跡のような物理的運動を知ることによって、さらに輝いてくるでしょう。

A. 天体の構造

地球は、太陽系に属する一つの惑星です。太陽系、さらには銀河系については多くのことを考えなければなりませんが、これは私の能力を超えるものなので、その勉強は皆さま

におまかせすることにしましょう。

ただ次のことだけは、暦の前提をなす知識として知っておきたいと思います。最近私は「地球と宇宙」をテーマにした展覧会を広島で見ました。そこで私は、私たちの世界は永遠でないことをあらためて学びました。太陽系の寿命は約 100 億年だそうです。既に 45 億年経ったので、あと 55 億年ほどの生存だということです。

人類が地上に登場するのは、原人でも 60～80 万年前、現生人類（ホモ・サピエンス）にかぎると、数万年前と言われてきました。そこから考えると、あと 55 億年という数字は、永遠と言ってもいいではないか、と思ってしまうかもしれません。

だが太陽系の寿命 100 億年は、そこまで安定していて、寿命が来るとそのままスーッと消えてゆくものなのでしょうか。死の兆候は、それよりずっと前から起こっているということはないでしょうか。100 億年という年数を、人間の寿命 100 歳（最近そう言われるようになりました。）にあてはめてみましょう。人間は 50 歳ぐらいになるとあちこち節々が痛くなり、病院やクリニックに通って、薬などを調合してもらうようになります。地球の余命 55 億年といっても、最近の地球温暖化などによる災害を思うと、地球の高齢化のせいなのかなと思ったりしています。進歩とか発展とか創造などと言うだけでなく、地球をいたわることも考えなければならない秋に来ているのかもしれない。

さて、私たちは高校時代に地学の授業で太陽系の惑星図を習ったことを思い出します。



太陽系は 8 つの惑星からなっています。その主成分の全質量から言うと、太陽は 99.86% を占めています。その残りの質量の 99% を 4 つの巨大惑星が占めています。残りの 0.002% を岩石惑星とよばれる水星、金星、地球、火星という惑星が占めている勘定です。地球は太陽の 10 万分の 1 以下になるでしょう。だから太陽と地球と月の運動を組み合わせることができる暦など、太陽系の中の小さなちいさな、取り上げることもないドラマかもしれません。

しかし稀有のドラマであることを、私たちは知っています。太陽から 3 番目に近いとこ

ろの星が地球です。両者を比較すると、太陽は地球の大きさの 109 倍、体積は 130 万倍、重さは 33 万倍です。一方、月は地球の 4 分の 1 の大きさです。太陽系の惑星のうちにはそれをまわる衛星があるものがあります。火星には 2 個、木星には 72 個、土星には 53 個が確定されています。だがそれらの惑星－衛星の関係の中で、地球と月の関係は、突出した大きさです。衛星と思えないほど大きい。質量でも 81 分の 1 です。

星間の距離にも特別な関係があります。太陽と地球の距離は 1 億 5000 万 km、地球と月の距離 38 万 km の約 400 倍にあたります。一方、太陽の直径は 140 万 km、月のそれは約 3600 km で、太陽－地球間の 400 分の 1 にあたります。物の大きさの見え方は距離に反比例しますから、地球に住む私たちには太陽と月がほぼ同じ大きさに見えるのです。

また星間の影響力（引力）を考えると、距離の 3 乗に反比例するわけですから、地球からすると、太陽の影響力は月のその半分ということになります。大阪湾に近い鳴門海峡や私の現在勤務している大学のある下関には関門海峡などは干満の差の大きいことで有名で、その潮の高低差は 4m 近いのですが、その 3 分の 2 は月の影響だということになります。

以上のことを頭においてみましょう。400 倍も大きさのちがう太陽と月が、地球の私たちからはほぼ同じ大きさに見え、月の方が太陽よりも 2 倍も大きな影響（引力）をあたえている、なんと不思議なことでしょう。

さらに、地球は太陽のまわりを公転していますが、その軌道から軸が 23.4 度傾いています。そのお蔭で、これは日本を含む中緯度の地帯についてですが、等分できる春夏秋冬の季節をつくります。

これは太陽系という壮大な宇宙の中で、ほんの微小な一角で起こる不思議な関係です。その不思議な太陽と地球と月の関係が、地球上に住む人類に暦の根柢をあたえてくれたのです。

B. 暦の種類

原始の形態においても、自然暦、経験暦はあったはずですが、青森県に紀元前 5000～4000 年頃の縄文時代の三内丸山遺跡があり、そこで大きなクリ林の畑が見つかりました。その畑に DNA が同じの、大きなクリが栽培されていたことが知られています。クリは縄文人の主食で、秋に収穫して 1 年中保存されていたはずですが、動物や魚の骨なども出てきました。そこには季節感があったはずですが、1 年のあるときに収穫し、保存して、住民は 1 年中それを食べて生きていたのでしょう。暦意識があったはずですが。

だが今私たちがとりあげるのは、大河の周辺で繁栄した文明における暦です。スケールの大きい暦です。ここでは太陽と地球と月が主人公です。この三つの星の運行の間に、また不思議な関係があります。地球は太陽に向かって、1 日かけて自転します。昼と夜が生まれます。その地球は太陽の周りを公転します。ほぼ 365 日、私たちはこれを 1 年とよんでいます。月が地球の周りを公転します。ほぼ 29.5 日。私たちはこれを 1（朔望）月とよ

んでいます。そしてこの1朔望月が12回繰り返されると、つまり12ヶ月でほぼ1年となります。

(1) 太陽暦

地球が太陽をまわる、太陽は1年約365.25日を基準にする暦。古代エジプト文明は、ナイル川の河水を活用した農業生産を基礎に発達しました。夏至の日、太陽の出る東の空に地球上で見られる恒星中もっとも明るい星シリウス星が現れるのを合図に、源頭地帯アビシニア高原に雨が降り始め、カラカラに干上がっていたナイル川の水嵩がその日から増しはじめ、洪水をもたらします。その雨期が終わって、上流から運ばれた肥沃土を利用した農業生産が始まります。水を制することが支配者の必須条件でした。そこに太陽暦、正確にはシリウス暦の原型が生まれました。その暦は、ユリウス・カエサルにより太陽暦として整備され、ローマ帝国の暦、その後キリスト教社会の暦、さらには近代資本主義の生産形態と結びついて、国際暦になりました。

(2) 太陰暦

太陽の出没は毎日1度ずつずれてゆきます(1年かけて地球は太陽の周りを360度まわります。それを地球の側から見ると、そうなります)。だがその毎日の変化を、地球上で確認するのは困難です。太陽暦の28日や30日や31日といった月の区切りは、1年を12で割ってできるもので、目印になる区切りがあるわけではなく、観念的区分です。でも大気や地中の温度、日照時間などを知るためには、特に農業などでは必要です。

一方、毎日まいにちの仕事をこなし、何日後かの計画を立ててゆくには、月の力を借りると便利です。月が地球を1周するには、ほぼ29.5日。その間月が影しか見せない新月から始まり、日没時西の空に現れる三日月、上弦(半月)を経て、満月に到り、ふたたび欠け始めて新月へともどってくる、1日の変化は、夜空を見れば分かります。暦の意識は、この朔望月の夜毎の変化からうまれたのでしょうか。太陰暦が太陽暦に先んじると言われる理由です。

この太陰暦が制度化されて厳格に守られているのは、イスラム教です。マホメットが迫害を逃れてメッカからメディナに聖遷した622年を、ヒジュラ暦元年とし、それ以後今日までを太陰暦でとおしてきました。その聖遷の最初の夜、新月だったそうです。マホメットのメッカ脱出は、暗闇の中で挙行されたのでしょうか。誰にも見えない新月という闇夜のとりは神の最高の贈物だったのでしょうか。あるいは砂漠の多いイスラムの民は、日暮れて夜に活動を開始する、それが太陰暦を護らせてきたのでしょうか。

だが、1朔望月の12ヶ月(太陽の1年に近い)は約354日、太陽暦より約11日短い。当時もそれ以後も、イスラム圏は世界で群を抜く科学の先進地域でした。かれらはそのマイナスを十分知りながら、太陰暦を約1400年間ずっと使用し、そこに宗教行事をあてはめてきました。

(3) 太陰太陽暦

太陰暦は人々の日々の生活暦でしょう。だが天文学、天体の仕組みでは、太陽暦を根底

に置くのは理に適っています。1年の始まりを、春分の日や夏至や秋分、あるいは冬至に置くのはその表れでしょう。東アジアでは、冬至と春分の真ん中にあたる立春に置くのも、同じ論理です。酒井抱一が描いた夏秋草屏風は立秋のころの光景でしょう。太陽暦上の区切りをそれぞれの風土や文化のちがいに合わせて新年とし、その前後の新月の日を元旦としています。日本の旧暦では、立春に近い前後の新月の日が正月元旦です。今年は、2月5日、ちょうど立春の翌日でした。月の形の変化が、新暦の日の推移とほぼ同じように進んだ理由です。

だが太陰暦だけにしがっている、毎年約11日太陽暦よりずれて、年を重ねるとその差がだんだん大きくなってゆく、それを調整するために当初は8年に3回、1月（閏月）を加えて13ヶ月の年を設けました。その後19年に7回閏月の加わる年としました。ふつうこの19年に7回数を、古代アテネ（紀元前5世紀）の数学者メトンの名を冠せて「メトン周期」とよんでいます、実際は古代バビロニアでは紀元前8世紀、中国でも同じころ、春秋戦国時代に同じ数が「章」とよばれていました。測量器具などが今日ほどなかった時代に、古代人の智慧に驚かされます。

3. もう一度「夏秋草図」に戻る。

酒井抱一が尾形光琳の風神雷神屏風の裏屏風として「夏秋草図」を描いたことは、日本の暦学の歴史においても、きわめて重要な事件でありました。宗達も光琳も風神雷神を描いて、ただ天上界を描くだけでありました。両神を眺めている地上の私たちとの関係は曖昧のままでした。抱一によって、夏の終わり、秋の入口の野の草花への深い感動を起点にして、天上界への畏敬の道が開かれたのでした。だが天上界と地上界をただ繋げたのではないと思います。地上界から天上界を眺めることによって、季節の世界の中に天上界の出来事を取り込んでゆこうとする、不遜とも言える思いがこめられていなかったのでしょうか。私はブリューゲルの「バベルの塔」の人間の意気をそこに見てしまいます。

抱一の屏風絵は、あくまで光琳の絵の裏でありました。だが天上界と地上界の逆転を頭におくと、描いた抱一にとっても、屏風を贈られた治済にとっても、抱一絵の方が主役であり、表でなかったのでしょうか。こちらのほうを見ることが多くなかったのでしょうか。ススキは治済、いや息子の11代将軍家斉の幕政を象徴している、思ったのではないのでしょうか。否、自分たちの祖父徳川吉宗以来の幕政を賛美していると言えないのでしょうか。観象授時、幕府はこのようなしてずっと民を護ってきた、そうみずからも思い、他からも賞賛してほしかったのではないのでしょうか。

幕府が江戸に開府した1600年頃、お膝元の江戸の人口は15万人ぐらいだったと言われます。だが18世紀初頭には100万人を超えていたそうです。今話題にしている、寛政暦改暦の18世紀末から19世紀初め、150万人以上という推測値もあります。

18世紀になると、民の食生活が変わったと言われます。ナタネ油が、稲作の裏作として

大量に生産されるようになり、それを燃料に人びとは行燈をともして夜も働くようになりました。商人は昼間店で商いをして、夜帳簿をつけるようになりました。1日2度の食事が、朝昼晩の3度になりました。必然的に米の生産量の増加が要求されました。

そこに天明の大飢饉（1782－88年）が特に東北地方でありました。まだ寒さに強い、たとえばコシヒカリのような稲の品種の開発はなされていませんでした。田沼意次が失脚し、松平定信の節約財政があり、人びとの生活がかえって暗くなるという時期もありました。この時代、幕府も藩も、政治的に財政的に大変な混乱の時代でした。雷神の豪雨は飢饉、風神の強風は政治改革に重ねて、この屏風を見ることもできるかもしれません。治済・家斉の時代がはじまり、ふたたび人びとは息を吹き返しました。江戸の町民が主役の化政文化が活気に満ち溢れていました。天体、地理、人体等におおきな科学的成果が実りはじめていました。

抱一の夏秋草図の世界はどこまでもさわやかです。精神の余裕をえたものだけが享受できる美の世界でしょう。

もうしばらくすると、世はふたたび飢饉と政治的腐敗が顕著となり、大塩平八郎や生田万の乱や蛸社の獄などが起こります。抱一の世界は、その短い平和の時代だったのかもしれませんが。

抱一の「夏秋草図屏風」は、日本画の常態である右から左への展開にしたがうと、屏風の左隻の外側には、もちろん想像上ですが、実りの秋の風景が広がっているはずです。晩夏から初秋にかけて、雷鳴がとどろき雨を降らせ、野分が吹いて植物の間に風をいっぱい入れて、害虫などを吹き飛ばした後には、五穀豊穡や秋まつりが待っているでしょう。

4. しめくくり

以上の話は、旧暦、つまり太陰太陽暦です。特に酒井抱一の「夏秋草図屏風」に多くの頁を割きました。だが旧暦では、朔望月への考察も大切です。これはこれで尽きない深い洞察が求められます。「三丘アカシアトークカフェ」での当日の講演では、月の満ち欠けの人生や歴史に投げかける物語についても話しました。速水御舟「炎舞」や広島作家灰谷正夫「柿」なども月に焦点を当てて話しました。また明智光秀の本能寺の変への蹶起の夜についても話しました。本稿では、そこまで話をひろげることができませんでした。ただ今日はインターネットの時代です。ここでは省略してしまった部分は、別の論考として皆さまにお届けできれば、と思っています。

ただ最後にこれだけは言っておきたいと思います。

「旧暦」なぞというと、カビの生える古い話、あるいは趣味人だけに通じる話題と思いがちです。たしかに旧暦の生命である月を、現代生活では見るものがなくなりました。街を歩いていて、両側に高層のビルが立っていて、月なぞ見えません。それに照明の発達で、

ひとは夜、月明りを必要としなくなりました。また都会生活は、不夜城をよしとして、夜を昼のように過ごすようになりました。建物や並木はライトアップされています。

だが地球温暖化の危機が叫ばれる今日、現代の都市生活を見直すことも必要になってくる、と私は思っています。化石燃料は使用しない時代になります。だが原子力利用も、私たちが福島第1原発の事故で体験したように、ひとたび事故が起これば、その地域はほとんど生活不可能になり、住民はそこに帰ることができません。再生エネルギーに頼るしかなくなるでしょう。

今日、太陽光発電は盛んです。でも農村に出かけると、休耕田は人手がないという理由で増えて廃田となり、その後に太陽光パネルが大量に設置されている風景をよく見るようになりました。だがこれではCO₂の削減は期待できません。太陽エネルギーのいちばん基本である光合成の現場が地上から消えつつあります。太陽光パネルは工業製品として大量生産されていますが、パネルの耐用年数はいずれきます。その破棄、リサイクルはどうするのでしょうか。風力発電もよく言われ、プロペラのまわる風景があちこちでよく見られます。だが当然、故障が多く、その振動で居住地域には設置できません。

地球では太陽の2倍も影響力のある、月のエネルギーについて日本ではあまり語られません。10年ほど前の話ですが、フランスや北欧では実用化していると聞きました。最近、韓国でも実用化されていると聞きました。日本は海に囲まれた国です。海の潮汐力を利用すべきです。人体の80%は水分だと聞きます。そこに月の影響があるはずです。日本では、その研究が遅れているようです。すぐ工業の採算ベースで損得の計算をしてしまいます。

月を語ることは、現代の最先端に立つことになりかもしれません。人類の長い歴史の中で、月は多くの働きをしてきました。それを私たちは学び直してよいのではないのでしょうか。その月のエネルギーを、旧暦をとおして学ぶことはたいへん意義のあることだと思います。

(本稿作成にあたって、三丘同窓会副幹事長の丸山登志子さんに並々ならぬお世話になりました。感謝しています。)

金田 晋<かなた・すすむ>

専門は美学。博士(文学)。1957年大阪府立三国丘高校卒。東京大学文学部卒、同大学院博士課程単位取得退学。広島大学総合科学部教授等歴任、2000年退官、広島大学名誉教授。現在東亜大学大学院特任教授。ひろしま美術館理事、蘭島閣美術館名誉館長等。